

第 33 期第 9 回研究会「人類学的実践としてのメディア研究」（理論研究部会企画）終わる

日 時：2013年2月2日（土）15:00-17:00
会 場：大学コンソーシアム京都 5 F 第4演習室
〒600-8216 京都市下京区西洞院通塩小路下る
キャンパスプラザ京都

問題提起者：原 知章（静岡大学）

討 論 者：勝野宏史（同志社大学）

司 会：山口功二

参 加 者：12 名

記録執筆者：山口功二

今回の研究会では、発表者の原知章さんが、飯田卓・原知章編『電子メディアを飼いならす』（せりか書房、2005 年刊）を取り上げながら、人類学におけるメディア研究、さらには人類学的メディア実践の系譜を批判的に検証した。その上で、ますます多層化する現在のメディア環境を調査・研究する上での人類学的アプローチについて問題提起がなされた

その際、昨今の新たな流れとして、デジタルネイティブによるメディア・エスノグラフィーの可能性について提示がなされた。その点に関して、原先生の学生である秋山絵美里さんから、K-Pop ファンのコミュニティ形成に関する報告がなされ、複数の SNS を使い分けながら（それも一つの SNS において複数のアカウントを駆使しながら）ファン活動を行うファンを参与観察する上での、エスノグラファーの立ち位置の難しさが改めて浮き彫りとなった。

続いて、討論者の勝野宏史さんより、デジタルメディア時代にメディア・エスノグラフィーを実践する上で、人類学者は「文化」「場所」「メディア環境」「テクノロジー」について新たな認識を構築する必要があるとの提言がなされた。勝野さんによると、グローバル化やデジタル化による社会の流動化は人類学者に方法論上の難題を突き付けているということであったが、会場からはむしろ流動化した時代だからこそ地に足がついた参与観察が求められているとの指摘がなされた。人類学者とその外部にいる研究者たちとの間で、メディア・エスノグラフィーの可能性に対する認識のズレが浮かび上がったが、それは今後このテーマを深化させる上で非常に興味深い反応であったといえるだろう。